

## 現代の富裕層が積み上げるバベルの塔

経済学の祖アダム・スミスの『国富論』(1776)は、経済学の最大の古典とされるが、その正確なタイトルは、「諸国民の富の性質及び原因についての研究」である。つまり、国民が豊かになるための経済的方途を学問的に詳しく検討しているのである。それでは、スミスは富をどのように定義しているのだろうか。

スミスによれば、国民にとっての富とは「国民が年々消費する生活の必需品と便益品の全て」であり、これらは労働の直接の生産物であるか、またはその生産物と引き換えに他の国民から購入したものである。

この定義に従えば、国民が豊かになるためには、できるだけ多くの国民が合理的な手段と方法で生産的労働に従事し、生活必需品を始め国民が求める有用品を豊富に作り出す必要がある。要するに、富とは生産的な労働によってもたらされ、国民生活を支える有益な財貨の集合である。

翻って、われわれが生きている現代社会について見ると、国民が必要とする有用品の多くは、営利企業によって商品として供給されている。企業は、国民の必要を優先するのではなく、あくまでも自社の営利目的で商品を生産し、販売している。

資本主義社会を特徴づけている私的所有制度と発達した社会的分業のもとでは、あらゆる財が国民の豊かな生活を支えるためではなく、売れば儲かる商品として市場に提供される。さらに、労働生産物以外にも、土地、水、その他希少な天然資源、景観、さらには人間の労働能力や技能までが「商品」化され、金儲けの手段に変えられる。

サラリーマンの多くは、自分の能力や技能が、経営者からは商品と見られていることを感じているのではないだろうか。かつて、小さな会社の経営を任されていた私の長兄は、新入社員の採用——当時は終身雇用が当たり前と考えられていた——は、一人2億円の買い物なのでおろそかにできないと述懐していた。

商品経済のもとでは、国民がどれほど必要としていても、買い手に購買力が伴わなければ提供されない。逆に、戦闘機や戦車のような破壊と殺戮のための道具でも、政府が買い上げてくれる限りは、「儲かる商品」としていくらでも生産される。

すでに世界中に蔓延し、武力紛争の手段となっている兵器をさらに増産することで、人類が豊かになるとは思えないが、兵器の生産が放棄される見通しは立っていない。ここでは、儲かるか否かだけが生産を決める基準であり、国民が豊かになるか否かは問題ではない。要するに、生身の国民から見れば、資本主義は目的と手段とが転倒した、倒錯的な社会体制である。

このことをグロテスクな姿で映し出しているのが、世界的に深刻化する格差（所得と富の不平等）問題である。専門家の見積もりによれば、近年の米国では、上位0.1%の富裕層が、全家計が保有する資産総額の22%を保有し、このうちの半分の11%を、0.01%の超富裕家計が保有している。

毎年世界の長者番付を公表する『フォーブズ』誌(2016)によれば、例年トップを占めるビル・ゲイツ(マイクロソフト創業者)の資産総額は、8兆4800億円である。投資の神様として世界中の金持ちの尊敬を集めているウォーレン・バフェット(投資組織バークシャー・ハサウェイ主催者)は、第三位で6兆8700億円となっている。因みに、日本人トップは柳井正(資産額1兆6500億円、ユニクロ)で、孫正義(1兆3220億円、ソフトバンク)がこれに続いている。

これら富裕層は、この莫大な富の4分の3を、自分と家族の生活を豊かにする有用物ではなく、株式、債券を始めとする有価証券で保有しており、邸宅、美術品、骨とう品、貴金属その他の奢侈品は、全体の4分の1に過ぎない。言い換えれば、富裕層の富の実体は、経済学で謂う「架空資本」であり、スミスの定義する富とは直接関係がない。

マッキンゼー・グローバル研究所のレポートによれば、世界で保有されている株式、国債、預金など金融資産の総額は225兆ドル(2012年)に上り、世界のGDP総額の3倍以上に達している。しかも、金融資産は、年々、GDPをはるかに上回る速さで増大し続けている。同時に、これら金融資産のますます多くが、世界でも文字通り一握りの人々の手に集中し続けている。

世界の富裕層は、なぜこれほど莫大な架空資本を飽くことなくため込むのだろうか。確かに株式や債券は市場で売却して現金に代え、なんでもほしいものを買うことができるが、ゲイツやバフェットにまだ欲しいものがあるとは思えない。付言すれば、バフェットは私人としては極めて質素な生活ぶり知られ、死後の遺産は慈善団体に寄付することを公表している。ゲイツもまた毎年莫大な資金を慈善活動や文化活動の支援に寄せている。

ところで、架空資本のもっと根本的な問題は、これらの証券は、証券市場でどれほど価値を持とうとも、それ自体は人間生活にとって有用物ではなく、単なる権利証券——しかも、証券会社のコンピュータにデジタルデータ化された——に過ぎないということである。

かつてレーニンが、金は将来の社会では便器のメッキに利用されると喝破したが、今日、貨幣材料として利用されなくなった金は、パソコンの重要な原料として利用されている。これに比べて株券や国債は、現在社会でもすでに生活上の有用性は皆無である。

現代資本主義の下では、富裕層だけではなく多くの企業も、年々の利益の大きな割合を、生産設備の増強や新規雇用ではなく、自社の株価を上げるための「自社株買い」や、他社の株式を含む金融資産の積み増しに充当している。こうした傾向は、現代資本主義の下では企業もまた、スミスが重視した国民生活の豊かさの実現とは根本的にかい離した目標に沿って運営されていることを表している。

富裕層が飽くことなくため込んでいる天文学的な額の架空資本は、日常生活ではチリ紙の代わりにさえならないが、資本主義という社会体制の下では確かに価値を持っている。その価値は、権利証券としての架空資本が所有者にもたらす配当、利子、その他の所得に基づいて「資本化」と呼ばれる算式で計算される。言い換えれば、架空資本の価値は、生活視点からの有用性ではなく、所有者の資産を増やす手段(=資本)としての「有用性」によって評

働かれ、価値あるものと見なされるのである。

資本は、マルクスが解明したように、価値増殖を自己目的として運動する「富」である。資本にとって価値増殖は究極の目的であり、この目的に限度はない。だから、富裕層がすでに有り余る「富」をさらに増やそうと苦心するのは、資本家の本性に根差した行動である。

バフェットが自ら質素な生活に甘んじながら、世界中の投資家から預かった資本を増やす活動に心血を注ぐのは、資本家の鑑にふさわしい振る舞いである。しかし、かれが全精力を傾けて積み上げる架空資本の巨大な塔に人類史的な価値はなく、資本主義社会の終焉とともに無に帰する運命にある。-